

住友 春翠（すみとも しゅんすい）

実業家。一五代住友吉左衛門友純の雅号。この一五代当主の選出には大変な騒動があった。明治二三年（一八九〇）一月、一二代当主吉左衛門が四七歳で死去、その子息友忠が一三代を継ぐが、僅か一週間後に一八歳で急死し、一族は眼を回した。とりあえず友忠の若妻、住友登久が一四代のワンポイントリリーフとなるが、一五代当主に親族・番頭たちが妾腹の常之助を立てようとした時、大反対を唱えたのが総理事広瀬宰平である。宰平は友忠の実妹満寿（ます）にいい婿養子をとって継がせねば住友家は崩壊すると力説、春翠に眼をつけた。春翠は元治元年（一八六四）右大臣徳大寺公純の六男に生まれた。前名を徳大寺隆磨、兄に有名な西園寺公望がいる。学習院大学卒業、宰平に口説き落とされた春翠は、同二五年満寿と結婚、翌年一五代当主となるが、俺は好きなようにやると公言、単なる公卿のぼんぼんではなく経営の才能を発揮して事業を拡張した。この面について語れば、一冊の書物ができるので省略する。但し彼は事業ばかりではない。見識ある文化人として公共の文化・芸術面に偉大な貢献を果たした。当主としての最初の仕事は、「別子銅山二百年記念」と称して高村光雲に頼み、「楠公銅像」を献納したことである。同三七年二〇万円也を投じ、「大阪府立図書館」（北区中之島一丁目）を寄付、図書購入費・維持費に一〇万円をつける心配り、しかも野口孫市らを用いて、古典様式に忠実なネオ・クラシズムスタイルの芸術的価値がある建物とした。いきさつは玄関ホールの銅版額に詳記されているが、そのなかの、「銃剣握るも国のため／静かに読むも国のため」は、春翠の名台詞として今も語り継がれる。図書館は重要文化財に指定されている。戻って同二八年天王寺区の茶臼山一帯を買収、敷地四万坪に豪邸を建てる。第五回内国勸業博覧会の折、一橋慶喜や伊藤博文始め政府の要人たちの宿泊所になるほどだが、さらに彼は小川治兵衛に敷地内の二万坪の作庭を命じた。治兵衛は通称植治、修学院離宮や二条城・桂離宮などの修復で知られ、「植治流」と世に呼ばれた独特の作庭術に長じた名手である。さしもの植治も都会のと真ん中の作庭には音をあげた。なにしろ得意の秘技「借景」が不可能である。苦心惨憺、砂や石を嘗めるように這いずり回りながら敷き詰め、植木一万七千本、庭石六百数十箇を配し、「留春亭」「喚魚亭」の二亭を備えた名庭「慶沢園」を築いた。慶沢園で盛大な園遊会が開かれたとき、某軍人高官は苦々しげに大声でいった。「商人のくせに、貴顕も及ばぬ大邸宅で豪遊するとは、なんたることだ！」。春翠は微笑を浮かべて静かに答えた。「必要とあれば、公共に差しあげるつもりです」。大正一〇年（一九二一）春翠は大阪市長池上四郎を訪ね、その一切を寄付した。ただ一つつけた条件が、「敷地内に美術館を建てて下さい」であった。これが現在の大阪市立美術館である。これより数年前、春翠は京都の鹿力谷に邸宅を建てて移り、やはり小川治兵衛に作庭させるが、この邸宅も昭和一九年（一九四四）総て京都大学に寄付している。春翠の趣味は広いが、最も熱中したのが中国の古銅器の収集で、三十年以上にわたり垂涎の珍しい器を集めるも、やはり公共の展覧に供した。今の「泉屋博古館」がそれである。また洋画にも関心が深く、鑑賞のみならず、黒田清輝や山本芳翠ら近代絵画の巨匠たちに資金を援助、

その活動を裏に回って支えた。岡田三郎助・藤島武二などの新進画家も、春翠が育成したといつてよからう。大阪能楽復興の祖といわれる大西亮太郎を後援、天王寺の堂ヶ島に土地千坪を寄付して「大阪能楽堂」建設に尽力した。これらの仕事を大金持ちの道楽だと、揶揄する人もあろう。しかし住友電線、住友製銅、住友倉庫、住友肥料、住友信託銀行、住友病院と、次々に業績をあげながらの営為であり、大変な傑物といえる。大正一五年（一九二六）六二歳で病没する。「春翠が中国銅器を集めたのは明治三〇年頃からだった。値段を厭わぬので名器が集まり、御本人の鑑賞力も高まる。陳氏十鐘を入手した時は、私を介して所有者に相談し十四万金を投じられた。これは道具屋的鑑賞眼では一寸分かりにくいもので、むしろ歴史的価値が優れているのだが、自分一個の鑑賞眼で高く買い取られる。見識の並々ならぬことが理解されよう。その後陳氏所有の他の銅器が来た。その内から数点を選ばれたが、いずれも歴史的価値の高いものであった。『泉屋清賞』『陳氏十鐘』等が出版された時、初版は銅器鑑賞家に委任したが、二度目からは学者に委ね、取捨選択もその意見を採用、少しでも原物を失ったものは何遍もやりかえ、本版・写真版では日本一の国華社で最善を尽くして精巧なものを作り、世界的に空前もものができた。ヨーロッパでも学者・鑑賞家から珍重される。同時に廉価版も作って大衆的に役立てようと試みた（内藤湖南「逝ける住友吉左衛門」）。